



Title	雨龍地方演習林の鳥類相
Author(s)	奥田, 篤志; 林田, 光祐
Citation	北海道大学演習林試験年報, 10, 113-115
Issue Date	1992-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72946
Type	departmental bulletin paper
File Information	1991_2B-3.pdf



II B-3 雨龍地方演習林の鳥類相

雨龍地方演習林 奥 田 篤 志
 ” 林 田 光 祐

はじめに

演習林は、主要な課題として天然林施業のあり方とその実践方法に関する試験研究を行っている。しかし、これまで林木だけを調査対象に進められてきた傾向が強かった。近年、環境問題がクローズアップされており、環境保全などを含めた総合的な施業法を確立するには、林木以外の野生動植物の生態などにも目を向けていく必要がある。

現在、演習林では木材資源としての樹木に関するデータは大量に保有しているが、それ以外の動植物に関するデータはほとんどないに等しい。演習林は今後、あらゆる野外科学の研究フィールドとしての重要性が増大すると予想され、生物相の記載などの自然環境の基礎データの収集、整備が急務である。また、動植物の多様性は、森林の豊かさなどの状態を示す指標となり、天然林施業の方法および方向を検討するうえで重要なものとなりうる。なかでも鳥類は、比較的観察や種の同定が容易で、調査方法が確立している。そこでまず、雨龍演習林の典型的な林相をもつ母子里観察林での鳥類相、とくにその季節変化を調べた。これは今後の研究（伐採の影響、林相による違いなど）を進展、計画する際に必要な基礎データを提供するばかりでなく、比較対照地として位置づけられる。

1. 調査地および調査方法

調査は416林班の母子里観察林で行った。ここは雨龍演習林の典型的な林相であるアカエゾマツを含む針広混交林で、最近伐採が行われていない。

調査方法は観察林内の歩道（1.1km）を一定の速度で歩きながら、歩道の左右それぞれ25m内（調査区域5.5ha）で確認された鳥類の種類と個体数を記録していくラインセンサス法を採用した。調査区域外で確認された個体も参考データとして種類のみを記録した。センサスは原則として月1回定期的に行うこととし、鳥類が最も活動的な早朝にできるだけ実施した。調査は1990年4月から開始し、現在も継続中である。ここでは1992年3月までの24回の調査結果を分析した。

2. 結果および考察

これまでの調査で53種（参考データを含む）の鳥類を確認した（附表）。調査月毎の種類数と個体数をそれぞれ図-1、2に示した。種類数、個体数ともに夏期に多く、冬は少ない。確認した53種のうち、調査地域に1年を通して生息する留鳥は17種、夏に渡来して繁殖する夏鳥が30種、渡りの時期に一時的に滞在する旅鳥が5種、冬期間滞在する冬鳥は1種だけであった。このように繁殖する鳥は多いが、越冬する鳥は少ないのが雨龍演習林の特色のひとつである。

種構成の特徴を見るために、出現回数と出現個体数の多い種をそれぞれ15種掲げた（表）。回数と個体数ともに15位以内に入った11種が調査地で優占する種と言える。その11種は大きく二分できる。コガラ・ヒガラ・シジュウカラ・ゴジュウカラ・キクイタダキ・キバシリ・コゲラの7種は留鳥であり、秋～春にかけての非繁殖期には混群（注）を形成している。これらの混群構成種は個体数で全体の50.1%を占める。残りの4種アオジ、ウグイス、キビタキ、センダイムシクイは夏

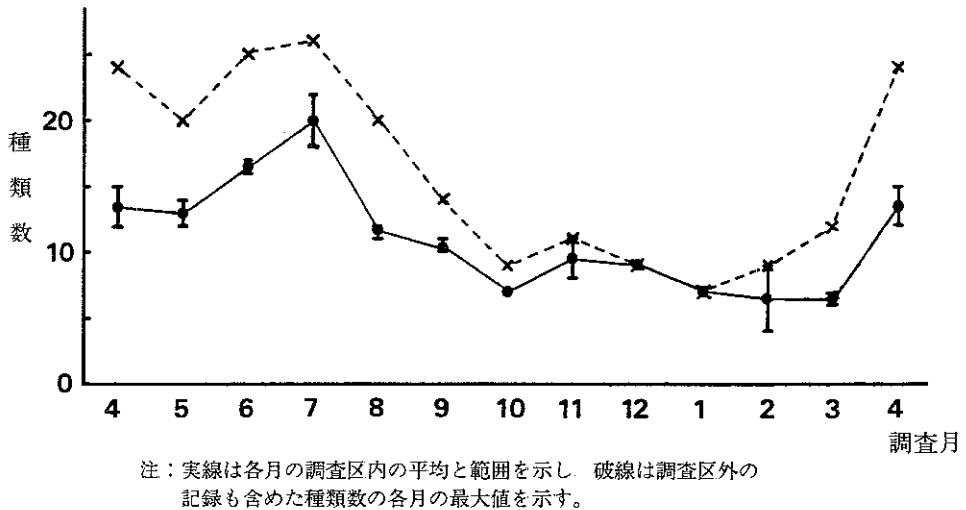


図-1 記録した鳥類の種類数の季節変化

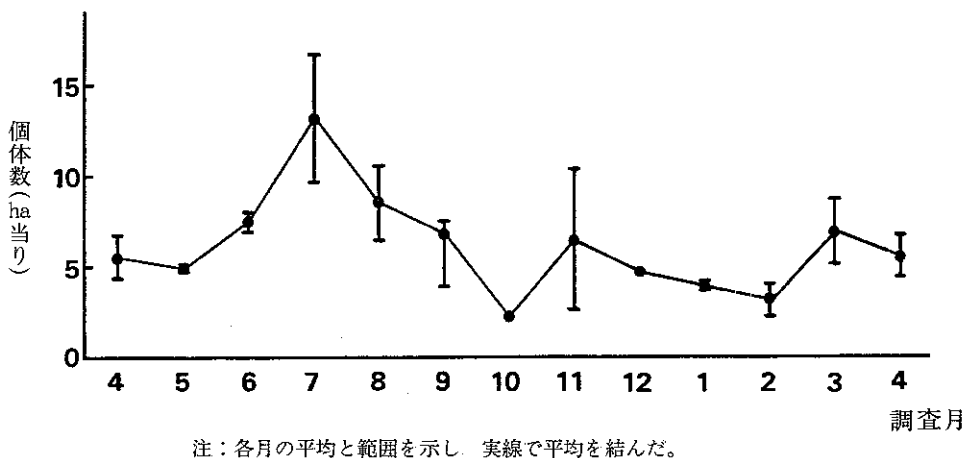


図-2 記録した鳥類の個体数と季節変化

鳥で、全体の16.9%、5~8月の夏期間に限ると27.2%を占める。この中で最も多く出現したアオジは、比較的明るい疎林に多く生息することが知られており、雨龍演習林の夏を代表する鳥のひとつである。

3. 今後の課題

今回は2年間のデータで雨龍演習林の鳥類相の特徴を解析することにとどめた。調査地域の森林は均一な構造をもっているわけではなく、溪畔林なども含む。今後はこのような視点で、森林の構造と鳥類相の関係も明らかにしていきたい。また、鳥類は季節的な移動を行うことから、生物季節学研究のよい材料となりうる。1992年度より環境庁の委託を受け、捕獲して足環を付ける標識調査を行う予定になっている。これらの調査を併用すればより詳細なデータを集められるだろう。

調査地である母子里観察林においては低温科学研究所との共同研究で気象、水文の大規模な観

表 出現回数および出現個体数から見た優占種ベスト15

12	出現回数		出現個体数			
	順	種 名	回数	順	種 名	個体数
	1	コゲラ	21	1	コガラ	97
	2	コガラ	20	2	ヒガラ	90
	3	キクイタダキ	19	3	アオジ	68
	3	ゴジュウカラ	19	3	キクイタダキ	68
	5	ヒガラ	18	5	ゴジュウカラ	66
	6	キバシリ	14	6	コゲラ	51
	7	アオジ	13	7	ギンザンマシコ	49
	8	シジュウカラ	12	8	ウグイス	32
	9	ウグイス	11	9	イカル	30
10		キビタキ	8	10	キバシリ	28
10		ヤブサメ	8	11	シジュウカラ	26
12		キジバト	6	12	キビタキ	24
12		アカゲラ	6	13	マヒワ	21
12		センダイムシクイ	6	14	センダイムシクイ	20
12		カケス	6	15	ウソ	18

附表 調査期間中に確認された鳥類リスト 53種

ワシタカ目	ワシタカ科	ト<ハヤカ>
キジ目	ライチョウ科	エ<ライチョ>
チドリ目	シギ科	マ<シ> <オシ> <シ>
ハト目	ハト科	キ<ハト> ア<ハト>
ホトトギス目	ホトトギス科	カ<ホト> <ホト>
フクロウ目	フクロウ科	<フクロ>
ヨタカ目	ヨタカ科	ヨ<カ>
アマツバメ目	アマツバメ科	ハ<アマ> <アマ>
キツツキ目	キツツキ科	マ<ツツ> <ツツ> <ツツ> <ツツ> <ツツ>
スズメ目	セキレイ科	セ<キレイ>
	ミソサザイ科	ミ<サザイ>
	ヒタキ科	
	(ツグミ亜科)	コ<ツグミ> <ツグミ> <ツグミ> <ツグミ> <ツグミ>
	(ウグイス亜科)	ウ<グイス> <グイス> <グイス> <グイス> <グイス>
	(ヒタキ亜科)	ヒ<タキ> <タキ> <タキ> <タキ> <タキ>
	エナガ科	エ<ナガ>
	シジュウカラ科	シ<ジュウカラ> <ジュウカラ>
	ゴジュウカラ科	ゴ<ジュウカラ> <ジュウカラ>
	キバシリ科	キ<バシリ>
	ホオジロ科	ホ<オジロ> <オジロ> <オジロ> <オジロ>
	アトリ科	ア<トリ> <トリ> <トリ> <トリ> <トリ>
	ハタオリドリ科	ハ<タオリドリ> <タオリドリ>
	カラス科	カ<ラス> <ラス> <ラス> <ラス> <ラス>

* <>内は区域外でのみ確認されたもの。(参考データ)

* コガラについては、野外識別では形態の類似したハシブトガラとの区別が正確に行えなかったためコガラとして扱った。

測システムが始動した。また、長期観察林の設定とそこでの野ネズミ生息調査も始めている。今後もこの観察林で様々な研究が行われるだろうが、これらの研究を如何に有機的に結び付けて展開していくかが、今後の重要な課題となるであろう。

(注) 非繁殖期にカラ類(シジュウカラの仲間)を主体として、キツツキ類など数種の鳥が、結び付きの弱い群れを形成して行動するもの。地域・環境などによって構成種が異なる。